中空耳環について

小池　寛

1. はじめに

横穴式石室から出土する副葬品は，一般に「黄泉戸喫」と関連する土器や各種馬具・武器，それに，装身具としての耳環等が知られている。土器については，築造年代を決定する上で必要不可欠な資料として認識されており，今更，言うまでもない。一方，馬具・武器についても，ある程度の型式学的変遷を考慮し，土器に対する補助的な役割と被葬者の性格を表現しうる資料として今日までに研究が積み重ねられているが，装身具としての耳環については，土器の型式差と耳環の個数から追葬の回数を推測する手段に使用される場合が多く，耳環自体に関する研究はほとんど見られないと言っても過言ではない。その要因としては，第一に時代毎に型式学的変遷がほとんど辿れないこと。第二に地域による特色を見い出せないこと。第三に材質が，時代別・地域別に区別できず所謂，金銅環(注1)が一般的であること等が考えられる。ところで近年，横穴式石室の調査が激増する中で所謂，金銅環と呼ぶには多くの問題を含む耳環が知られるようになった。その耳環とは，鉄芯環(鉄環)・木芯環(木環)・中空環を挙げることができる。

拙稿では，特に，木環を含む中空耳環を取り上げ，製作技法の問題点や中空耳環の分類・大きさ・分布を考え，更に，副葬品として使用された年代等を整理し，具体的に副葬されている古墳を概観する。その結果から中空耳環が副葬品として持つ意味を考え，古墳自体の初葬者の性格の一面を明らかにしたいと思う。

ただ，分類等の資料操作の段階で，耳環が極めて普遍的な副葬品であるため，報告書の図面が中実であるものも断面が白抜きであったり，詳細な記述がなく耳環の有無についてのみ報告した例がある。ここでは，図面・記述において確実に中空環であることが確認できた資料についてのみ取り上げ，判然としない資料については割愛した(注2)。なお，耳環の形態は，個体差がほとんどないため，大きさの表を作成することにより集成図にかえた。

2. 研究小史

古墳時代に耳環が副葬品として成立するのは，五世紀段階であり，耳朶に装着する親環と1・2本の遊環に垂飾をつけた所謂，垂飾付耳飾が研究の先駆けとなった。

藤田亮策[注3]は，日本から出土する耳飾は，朝鮮半島からの舶載品と工人集団の渡来により発達した国内産の二系統であると論じたが，一方，小林行雄[注4]は，金・銀製垂飾付耳飾は，五世紀から六世紀の舶載品であると論じ，今日まで論議が持たれている。これらの学史に立脚した野上丈助[注5]は，「(略)単に国産か輸入かという観点からではなく，日本出土の耳飾，朝鮮出土の耳飾相互の技術系統・分布等を詳細に追求することによって一つの結論が導き出される必要がある(略)」とし，集成作業から耳飾を詳細に分類し，各型式について論じた。垂飾付耳飾が出土する古墳の被葬者の性格を論考した堀田啓一[注6]・安井良三[注7]は，従来の型式分類での問題を指摘しつつ，耳飾が副葬品として持つ意味を考え，具体的な考察を行った。これらの研究も垂飾付耳環を前提にしたもので所謂，金銅環を取り上げたものではない。今井　堯[注8]は，岡山県山陽町岩田地区の古墳調査を行った神原英明の記述から「(略)普遍的に見出される耳環も，地方における基礎構造を解明する資料となり得る(略)」と論じ，軽視されがちな遺物に対して，その重要性の認識を訴えた。一方，藤井和夫[注9]は，朝鮮半島における所謂，太環式耳飾について論及し，耳環の装着法から耳環として使用されたか否かについて研究者の記述を引用し説明した。その中で，多量に出土している慶州地方の古墳出土例を中心に「耳朶に穿孔してそこに耳飾を直接垂下する法であった」とし，「実用性を超越した過度の装飾が施された副葬用の耳飾としての太環式垂飾の極致の姿」であると結んでいる。研究史的には前後するが，耳環を総括的に取り扱った菅谷文則[注10]は，製作技法・年代等についての調査から使用された時期や着装方法を考察し，広く伝播する理由を民間的流通であると推定し，垂飾付耳飾が単なる耳環に略された段階以後を考察した。耳環についての論考の中で最も充実したものであることは広く知られている。

一方，製作技法からは，小林行雄[注11]が細金細工の技法は，五・六世紀には日本に伝わらず，一部が伝えられたと考えるものに中空環・空玉・鈴等があると論じ，アマルガム法の用例を説明した。その鍍金鍍銀について亀井　清[注12]は，四種類の方法をあげ，アマルガム法以外の三種類の方法を想定した。

以上が研究小史であるが，研究成果を概観すると，(1)小林行雄が指摘した技術伝播の問題，(2)堀田啓一が論述した副葬品としての意義づけ，(3)菅谷文則が指摘した耳環の民間的流通等の問題に分けることができる。これらが今後の耳環研究の主題と言える。

3.　分類と大きさ

前章では，五世紀代から出現する垂飾付耳飾を中心に研究史を概観したが，ここでは，垂飾付耳飾が六世紀以降，耳朶に装着する耳環だけに略され，広く普及した時代の中空耳環の分類を行い，その型式による大きさの違いや所謂，金銅環との比較を通し，技術的分

野から若干の解釈を加えてみたいと思う。

(1) 分　類

耳飾は，埋蔵状態，特に，土壌成分により遺存状況に極端な差異が見られる。環自体が緑錆に侵されたものや，鍍金鍍銀が完全に残存しているもの等様々である。分類に際しては，環自体の形態をⅠ～Ⅳ類に分け，鍍金鍍銀の別をａ～ｃで表現した。なお，耳環が完形品である場合，断面の観察は不可能であるため，報告書の記述に従うこととした。又，付として鉄製耳環の出土例についてもあわせて記述し，便宜をはかった。

Ⅰ類……環芯のないもの

京都府宇治市隼上り２号墳(注13)の出土例は，耳環の内側に接合した痕跡を残すものである。これは，環表面では認められないが，環裏面では接合した段差があり，アマルガム法以外の技法によるものと判断できる。ただ，環の断面はほぼ正円に近く，木芯に巻きつけたとも考えられるが，環内部には木質部の残存が全くないことから，薄金・銀板を何らかの形に押えながら延し，曲面作製の際，正円の形態を損わないように成形したものであろう。亀井　清の耳環製造技法の(四)にあたる(注14)。なお，奈良県天理市ホリノヲ６号墳の出土例は，空洞部に砂質の土が入っており，円形に成形する段階で形を損なわないために砂質土を入れたとも考えられる(注15)。

Ⅱ類……銅環自体が中空なもの

銅環自体が中空で，アマルガム法により鍍金鍍銀をしたもの。奈良県天理市石上北Ａ５号墳(注16)や福岡県若宮町小原８号墳(注17)等に類例が見られる。所謂，金銅環やⅠ類に比べ耳環自体の形態が，正円を呈さないものが多く，耳環の断面が楕円形に近いものがある。これは，銅環の中空体を製作する時点からの歪みであり，製作技法としては丸棒に厚さ1mm程度の銅板を巻きつけ，中空棒をＣ字形に曲げたと考えられる。結果的にその歪みが断面等に出ているのであろう。

Ⅲ類……木芯のもの

環芯が木製で，木を耳環状に成形し，銅板を巻きつけアマルガム法により鍍金鍍銀したもの。兵庫県城崎町二見谷４号墳に出土例(注18)がある。二見谷４号墳の耳環は，木芯だけが残存しており，報告書の記述によると金銅張りとある。Ⅰ類との区別は，木質部が残存していることによるが，Ⅰ類の中にもⅢ類と判断すべき資料もあろう。

Ⅳ類……環芯が不明なもの

出土した耳環が完形品である場合，全体の大きさに対する重量から中空か否かについては推定できるが，既報告の中で中空と明記しているものをⅣ類とした。ただ，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ

類の区別がつけ難いため，今後，何らかの判断基準を設ける必要があることを指摘しておきたい。

Ⅴ類……鉄芯に鍍金鍍銀したもの（中実環）[注19]

ⅤA類・鉄芯のみに薄金・銀板を張り合わせたもの。技法的には，鉄にアマルガム法の適応はなく，Ⅰ類と同じ技法で金・銀板を付したと考えられる。

ⅤB類・鉄芯を銅板で被覆し，アマルガム法により鍍金鍍銀したもの。出土例を見ると，鉄錆が浸透しており，銅板がごく一部にしか観察できないものが多く，鍍金鍍銀の残存はほとんど見られない。

以上が，環芯を中心に分類したもので，Ⅰ類からⅤ類に分けられるが，あくまで便宜的な分類であり，例えば，Ⅰ類とⅣ類の類似性やⅤA類とⅤB類の類似性等，今後に若干の問題を残している。

次に，細金細工としての金・銀について分類するが，アマルガム法や薄金・銀板を張りつけたものとの区別なしに分けた。

a…金で環芯を被覆したもの

b…銀で環芯を被覆したもの

c…埋蔵状態が良好でなく，金・銀の被覆の判断ができないもの。この中には，環芯である銅・鉄のみが残存しているものも含むこととする。

(2)　大きさ

Ⅰ類からⅣ類の耳環と所謂，金銅環との大きさの比較をし，その差異がいかなる要因であるかを考え，各分類に反映させて解釈したい。

表2のように，現在知り得た中空耳環は33例あり[注20]，その平均値は3.1×3.0cmになる。その数値については，統計学上の問題も指摘されるところであるが，資料的な限界と言う認識に立てば，問題の一部は解消できると考えられる。一方，所謂，金銅環は，普遍的な遺物であるため，サンプリングが問題となるが，ここでは，一応，資料数を中空耳環の2倍に増やし，無作為に抽出することによりデータに客観性を与えた。その結果，60例を対象にし，その平均値は2.8×2.8cmとなった。この2つのデータでは，中空耳環の方が若干大きい値になり，又，表1でもわかるように範囲の広がりも中空耳環の方が広いと言える。これは，所謂，金銅環の製作技法は，銅製棒を単にC字形に曲げるだけのもので環の太さには制約を受けることはないが，中空

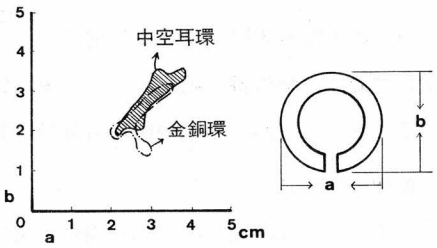

表1　中穴耳環と金銅環の大きさの比較

耳環は，前述した太さを保たねば環状に成形するのは困難である。Ⅰ類は，特に環の太さが重要で，細環であれば確実に耳環としての形態が保てなくなる。たとえ，砂質土を環の空洞部に入れても一定の太さがなければ成立しない。Ⅱ類の場合は，出土例でもわかるように断面が楕円形を呈するものが多く，Ⅰ類同様，一定の太さがなければ環としての形状は保てない。Ⅲ類については，大きさは他類や金銅環に比べ問題にならない。木の加工技術は，弥生時代以降では優品が見られ，耳環状に加工することは自由自在であったと考えられる。ここでは，外観的なものを意識して作成したと考えたいが，木芯に銅板を張ることを考慮すれば，若干ではあるが，数値的に中空耳環の平均値に近づくのかもしれない。尚，Ⅳ・Ⅴ類については，性質上，同一とするには問題があり，この見解に従う必要はない。

以上，分類・大きさについて述べたが，特に，大きさについては文中にある「一定の太さ」が，統計処理により出た平均値に近いのではないかと考えられる。

4. 出土例と古墳の概観

ここでは，中空耳環が出土する遺跡について集成し，遺跡の年代・分布を明らかにし，中空耳環を解釈したい。なお，中空耳環を副葬している古墳について数例をあげ概観するが，大半が群集墳の形態をとるため，群構成がある程度明らかになっているものについてのみ述べる。

(1) タキハラ3号墳(奈良県天理市)[注21]……タキハラ3号墳は，石上・豊田古墳群のタキハラ支群内に所在する。石上・豊田古墳群は，石上北支群・石峰支群・ホリノヲ支群・タキハラ支群からなる大群集墳である。タキハラ支群で見られる埋葬主体部は，片袖式横穴式石室(1・5号墳)，両袖式横穴式石室(3・4号墳)，無袖式横穴式石室(2号墳)や小石室がある。築造順序は，5号墳が6世紀初頭で以下，4・3・2号墳となり，7世紀初頭に1号墳が築造される。中空耳環が出土した3号墳は，玄室平面プランが，ほぼ正方形に近く，奥壁・側壁が他の古墳と比べて大きな石材を使用している。本古墳で最も注目すべきは，玄室床面に長方形・正方形，それにL字形に切り込んだ敷石を緻密に敷き詰めている点で，群中，最も精緻な石室であると言える。

(2) ホリノヲ6号墳(奈良県天理市)[注22]……ホリノヲ6号墳は，6基から構成されるホリノヲ支群にある。支群の石室構造は，通有に見られる片袖式横穴式石室で，礫床を持つもの(5・6号墳)がある。6号墳は最高所に位置し，群の中でも比較的，装飾類が多く出土している。これをホリノヲ支群で見た場合，装身具の量が多いことと，馬具のセットが見られる。これは，石室構造・規模では他の古墳と同じであるが，副葬品が充実していること

表2　中空耳環出土地一覧表（付・鉄環出土地）

分類	古墳名	所在地	主体部	耳環の大きさ単位 cm	古墳基数	年代	備考
Ⅰ(Ⅲ)a	丹切43号墳	奈良県宇陀郡榛原町	横穴式石室	3.4×3.23	50基	6c末～7c初	(注23)
Ⅰb	隼上り2号墳	京都府宇治市菟道隼上り	〃　(片袖)	3.80×3.50 3.80×3.35	3基以上	6c後	(注24)
Ⅰb	天神山3号墳	京都府園部町	〃　(〃)	—	4基	6c後	(注25)
Ⅰb	城ノ尾古墳	京都府福知山市城ノ尾	〃　(無袖)	3.00×3.30	1基	6c後	(注26)
Ⅱa	高谷10号墳	京都府綾部市高谷	〃	2.80×2.20	10基	6c末	(注27)
Ⅱa	狐塚横穴	奈良県奈良市山陵1227の1	陶棺	3.40×3.20 (6.6g) 3.30×3.20 (10g)	3基	6c末～7c初	(注28)
Ⅱa	石上A5号墳	奈良県天理市石上町(石上支群)	横穴式石室(両袖)	2.60×2.40	10基(石上支群)	6c末～7c初	(注29)
Ⅱa	ホリノヲ6号墳	奈良県天理市豊田町(ホリノヲ支群)	〃　(片袖)	3.30×3.00	6基～10基	6c末	中空玉(注30)
Ⅱa	タキハラ3号墳	〃(タキハラ支群)	〃　(両袖)	2.45×2.40	7基	6c末	床面敷石(注31)
Ⅱa	雁多尾畑支群6号	大阪府柏原市雁多尾3842	〃　(片袖)	3.10×2.90	22基	6c後	(注32)
Ⅱa	雲雀丘B1号墳	兵庫県宝塚市雲雀ケ丘	〃　(両袖)	3.35×2.95	76基	6c後	(注33)
Ⅱa	岩田第14号墳	岡山県山陽町	〃　(片袖)	2.80×2.64 (3.9g) 2.80×2.59 (4.9g)	14基	6c末	(注34)
Ⅱa	大迫古墳	広島県高田郡八千代町	〃　(無袖)	3.10×3.20	1基	6c後	(注35)
Ⅱa	犬塚第1号墳	広島県比婆郡東城町	〃　(片袖)	2.50×2.90	1基	6c中	(注36)
Ⅱa	石塚古墳	広島県山県郡千代田町	〃　(無袖)	2.20×2.20	2基	6c～7c	(注37)
Ⅱa	御崎山古墳	島根県松江市大草町	〃　(両袖)	3.50×3.10	1基	6c後	石棺 (注38)
Ⅱa	片江第6号墳	福岡県福岡市大字片江	〃　(〃)	2.00×2.45	8基	6c後	(注39)
Ⅱa	広石Ⅳ-2号墳	福岡県福岡市西区捨六町広石	〃　(〃)	2.30×2.20	13基	6c末	(注40)
Ⅱa	西浦1号墳	福岡県春日市	—	—	—	—	(注41)
Ⅱa	大牟田43号墳	福岡県福岡市	—	—	—	6c～7c	(注42)
Ⅱa	小原8号墳	福岡県鞍手若宮町	横穴式石室(片袖)	3.00×3.00	8基以上	6c後	(注43)
Ⅱa	東山鳶ケ森6号墳	愛媛県松江市	—	—	—	—	(注44)
Ⅱa	〃　8号墳	〃	—	—	—	—	Ⅳ？
Ⅱa	天神山2号墳	愛知県岡崎市真福寺町西110	横穴式石室	2.00×2.00	7基	6c末～7c初	胴張りの石室 (注45)
Ⅱa	上総金鈴塚	千葉県木更津市長須賀	〃	2.80×2.00	1基	6c末	(注46)
Ⅱa	中田横穴1号墳	福島県いわき市沼の内	装飾横穴	3.30×3.30 2.80×2.80	1基	6c末	Ⅱ，Ⅴa (注47)
Ⅱa	長原5号墳	長野県上高井郡保科村高下	横穴式石室	2.00×2.00	21基	6c末～7c初	積石塚 (注48)
Ⅱb	正道15号住居址	京都府城陽市寺田正道	住居址	1.80×1.80		6c後	(注49)
Ⅱb	丹切33号墳	奈良県宇陀郡榛原町	磚槨式石室	2.09×1.98	50基	6c末～7c初	石棺 (注50)

分類	古墳名	所在地	主体部	耳環の大きさ単位 cm	古墳基数	年代	備考
Ⅱb	第2調査区KO10号墳	岡山県勝央町植月中茂平	横穴式石室(無袖)	3.30×3.00 3.20×3.20	1基	6c末	(注51)
Ⅱb	浦谷D-8号墳	福岡県宗像市大字朝町	〃	2.20×2.20	12基	7c初	(注52)
Ⅱb	下吉田41号墳	福岡県北九州市小倉南区吉田	—	2.65×2.40	—	6c後	(注53)
Ⅲa	二見谷4号墳	兵庫県城崎郡二見谷	横穴式石室(両袖)	3.20×3.02	4基	6c後	石棺・鈴(注54)
Va(注55)	羽根戸B-11号墳	福岡県福岡市西区大字羽根戸	〃 (片袖)	2.80×3.20	13基	6c中	
Va	奴山34号墳	福岡県宗像郡津屋崎町	〃 (両袖)	2.60×2.60	60基前後	6c後	
Va	岩立C古墳	熊本県八代郡宮原町立神岩立	〃	2.00×1.80 2.80×2.40	1基	6c後	櫃
Va	原B-13号墳	静岡県藤枝市	—	—	—	—	
Va	板澤6号墳	静岡県志太郡岡部町	—	—	—	—	
Va	印内台第1号横穴	千葉県船橋市西船	横穴式石室	2.00×2.00	?	?	横穴
Vb	老松1号墳	兵庫県西宮市	〃	2.70×2.70 (9.5g) 2.95×2.95 (13.7g)	5基	6c後	
Vb	大室436号墳	長野県長野市松代町大室	〃 (無袖)	2.80×2.80	448基	7c	積石塚
Va・b	常楽寺山3号墳	滋賀県蒲生郡安土町	〃 (片袖)	3.20×3.00	3基	6c後	
Va・b	湯谷古墳群	長野県長野市	—	—	—	—	
Va・b・c	岩田第8号墳	岡山県山陽町	横穴式石室(片袖)	2.48×2.20 2.60×2.31	47基	6c末～7c初	陶棺
V	浦谷H-2号墳	福岡県宗像	—	—	—	—	

を指摘できる。

(3) 丹切33号墳(奈良県宇陀郡榛原町)(注23)……丹切古墳群は総計50～60基からなる大群集墳であり，石室構造や出土遺物はバラエティーに富んでいる。特に，33号墳は，所謂，磚槨式石室で，玄室内には組合せ式箱式石棺が安置されていた。石室・石棺に使用されている石材は，所謂，榛原石を使用しており，節理状剝離を利用し巧みに築造している。磚槨墳は，奈良県桜井市舞谷古墳群の調査等で研究が進み，百済系技術者集団の墓として認識されるに至っており，本古墳の場合も，それらと密接なつながりを持った人物が被葬者である可能性が高い。本墳は，磚槨式石室を有し，組合せ式石棺を持っていることから，同時期に築造された古墳群中，最も学問的価値が高いものである。

(4) 二見谷4号墳(兵庫県城崎町)(注18)……4基からなる古墳で，4号墳は組合せ式家形石棺を有し，群中最も石室規模が大きい。玄室は，主軸線に対する玄室幅が4対1となる長い構造となっている。又，石棺は，極めて緻密な構造を持っており，石室の構造とともに本古墳群を考える場合最も重要な古墳である。一方，遺物には，鈴が出土しており，総合的に考えると群中，最も有力者の奥津城であった可能性が高い。

本来ならば，表2にあげた全ての古墳について説明を行うべきであるが，古墳の全容がわかるものが制約されており，以下，概観するに止めたい。

中空耳環を副葬品としている古墳は，西日本に集中し，特に，福岡県からの出土例が最も多い。又，畿内では奈良県・京都府に集中していると言える。

中空耳環が古墳築造当初か追葬段階に副葬されたかについては明確にすることはできない。Ib類の京都府宇治市隼上り2号墳の場合，玄室の礫床直上で2点とも検出している。Ⅱa類の奈良県天理市タキハラ3号墳は，玄室全面に敷石を敷く極めて精緻な横穴式石室であるが，出土地点は，敷石の間である。同類のホリノヲ6号墳は，玄室の礫床直上から出土している。これらは，古墳築造時の被葬者に装着されていたと考えても良い資料で，築造年代は六世紀後半である。ホリノヲ6号墳調査報告書の小結で，細身型から金張太身型，そして，金メッキ中空太身型の時期的特色を考えており，前述した例とは反対の結論を展開している。しかし，これらの変遷過程については，明らかな根拠を提示されておらず，中空太身型耳環が最終の追葬段階に副葬品として使用されたか否かについては，今後問題が残る。

5. 年　　代

表2に中空耳環が出土している古墳の築造年代を記入してある。年代を概観すると，副葬品として使用された最も多い時期は六世紀後半であり，七世紀代になると激減していることがわかる。これは，金銅環の場合とほぼ同じ傾向を示すもので，耳環全般に見られるものと解釈できる。(注56)

6. ま と め

中空耳環を検出した古墳は，大半が群集墳の形態も呈するもので，初期群集墳には見られないと言える。

研究小史の章でも述べたように，耳環自体の研究は少なく，中空耳環についても所謂，金銅環の一形態に過ぎないと考えられてきた。菅谷文則は，耳環の伝播は，中央政権が流通の中心ではなく，六世紀代の流行と民間的伝播と論述した。これは，耳環の出土数等から考えて誤りないものと考えられる。一方，今まで考えてきた中空耳環については，タキハラ3号墳・ホリノヲ6号墳・丹切33号墳・二見谷4号墳等でもわかるように，古墳群の中でも中核的な古墳から出土しており，通有に見られる耳環と同一に取り扱うことに問題がある。中空耳環の絶対数や大きさ等の違いから民間的伝播や流行とともに，一つの流通経路で多元的に供給されたと考えるのが妥当である。

最後に中空耳環が出土する古墳について述べ，被葬者の性格を推測したい。中空耳環が京都府宇治市隼上り２号墳のように確実に築造時の副葬品であるとすると，問題となるのは，ホリノヲ支群の小結での指摘である。それは，時代的特色が細身環から中空耳環へ変遷していくと言うものであるが，中空耳環が築造当時に副葬された可能性もあり，出土状況をしっかり検討する必要があるのではないだろうか。

京都府城陽市正道遺跡・15号住居址からの中空耳環出土は，古墳以外の出土例としては，現在，唯一である。正道遺跡[注57]は，後に官衙が成立する重要な遺跡で，その前段階の集落と言う意味では，在地豪族の拠点であると言える。その拠点集落からの出土は，極めて重要な意義がある。従来，耳環の装着法については，諸説紛々であり，重量のある金銅環の日常着用を疑う見解も多い。しかし，中空耳環の場合は，金銅環に比べて軽く，十分，日常の着用を肯定しても良く，それ故，日常的に耳環を装着できる人物が，古墳の被葬者であると考えたい。今後，中空耳環が出土する古墳群と集落との関連や地域での位置づけなどを詳細に分析することにより，中空耳環の意義がより一層明らかになると確信している。

（小池　寛＝当センター調査課調査員）

注１　拙稿で使用する金銅環とは，通有に見られる中実の耳環を示す。
注２　表２の一覧表は，完全に集成できておらず，今なお，集成作業中である。
注３　藤田亮策「朝鮮及び日本発見の耳飾に就て」『朝鮮考古学研究』1948
注４　小林行雄「倭の五王の時代」『日本書紀研究』第２冊　塙書房　1966
　　「金銀」『古代の技術』　塙書房　1962
注５　野上丈助「日本出土の垂飾付耳飾について」『藤沢一夫先生古稀記念』　1983
注６　堀田啓一「冠・垂飾耳飾の出土した古墳と大和政権」『古代学研究』第49号　1967
注７　安井良三「我が国発見の金・銀製垂飾付耳飾一装身具のセット関係についての試論」『史想』第13号　1967
注８　今井　堯「古墳の副葬遺物」『考古資料の見方《遺物編》』柏書房　1977
注９　藤井和夫「朝鮮三国時代古墳出土の所謂〝太鐶式耳飾〟に就いて」『神奈川考古』第19号　1984
注10　菅谷文則「古墳時代の耳飾について一とくに金環を中心にして一」『古代国家の形成と展開』吉川弘文館　1976
注11　注４に同じ
注12　亀井　清「岩橋千塚出土の金属の分析」『岩橋千塚』1967
注13　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが，京滋バイパス建設に伴う事前調査として1984年に行った。
注14　注12に同じ
注15　泉森　皎「ホリノヲ６号墳」『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ』　奈良県教育委員会　1975
注16　泉森　皎「石上北Ａ５号墳」『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』　奈良県教育委員会　1976
注17　福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XI』　1977
注18　城崎町教育委員会『二見谷古墳群』　1975
注19　鉄芯は，中実であり一応分類に入れたが，本文では取り扱えなかった。今後の課題としたい。

注20　今後，更に集成作業を進める必要がある。
注21　河上邦彦・上田喜美「タキハラ3号墳」『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』　奈良県教育委員会　1976
注22　注15に同じ
注23　奈良県教育委員会『宇陀・丹切古墳群』　1975
注24　注13に同じ
注25　園部町教育委員会『天神山古墳群・現地説明会資料』　1985
注26　京都府教育委員会『城ノ尾古墳発掘調査概要』埋蔵文化財発掘調査概報　第2分冊　1981
注27　綾部市教育委員会『高谷古墳発掘調査概要』　1974
注28　奈良市教育委員会『山陵町狐塚横穴群の調査』　1985
注29　注16に同じ
注30　注15に同じ
注31　注21に同じ
注32　柏原市教育委員会『雁多尾畑古墳群』　1980
注33　宝塚市教育委員会『雲雀丘古墳群B支群1号墳』　1980
注34　山陽町教育委員会『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6)』　1976
注35　土師埋蔵文化財発掘調査団『土師・土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1973
注36　犬塚古墳群発掘調査団『犬塚古墳群発掘調査報告書』　1980
注37　広島県教育委員会『石塚古墳発掘調査概報』　1974
注38　島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』　1975
注39　福岡市教育委員会『片江古墳群発掘調査報告書』　1973
注40　福岡市教育委員会『広石古墳群』　1977
注41　春日市教育委員会『西浦古墳群・福岡県春日市大字上白水所在遺跡の調査』　1982
注42　大牟田古墳調査団『福岡市・大牟田15号・43号墳発掘調査報告』　1971
注43　注17に同じ
注44　松山市教育委員会『東山鳶が森古墳群調査報告書』　1981
注45　愛知県立岩津高等学校『岡崎市・天神山古墳群』　1969
注46　早稲田大学考古学研究室『上総金鈴塚古墳』第1冊　1952
注47　いわき市史編さん委員会『いわき市史』　1971
注48　大塚初重・小林三郎・下平秀夫『信濃・長原古墳群―積石塚の調査―』　長野県考古学会　1968
注49　城陽市教育委員会『正道遺跡発掘調査概要』　1973
注50　注23に同じ
注51　勝央町教育委員会『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　1976
注52　宗像市教育委員会『浦谷古墳群Ⅰ』　1982
注53　(財)北九州市教育文化事業団，埋蔵文化財調査室『下吉田古墳群』　1983
注54　注18に同じ
注55　一覧表の中での文献名は，一部略して記入した。又，Ⅴ類は，本文で取り扱わないため，文献名は全て略した。
注56　注10で菅谷氏も指摘しておられる。
注57　研究論文は数多くあるが，最も新しい文献名をあげておく。伊賀高広「山城国久世郡に於けるミヤケ設定の可能性について―正道遺跡の若干の検討を中心にして―」『奈良古代史論集』第1集　1985.5